

まくらのそうし  
枕草子

せいしようなごん  
清少納言

はる  
春はあけぼの

ようよう  
やうやうしろくなりゆく山ぎは

すこしあかりて

むらさき  
紫だちたる雲の

ほそくたなびきたる

なつ よる  
夏は夜

つき ころ  
月の頃はさらなり

やみ お  
闇もなほ、

ほたる  
螢のおほく飛びちがひたる

また、ただ一つ二つなど

ほのかにうち光りて行くも、をかし

あめ  
雨など降るも、をかし

秋は夕暮れ

夕日のさして、山の端いと近くなりたるに

鳥の、寝所へ行くとして

三つ四つ、二つ三つなど

飛び急ぐさへ、あはれなり

まいて、雁などのつらねたるが

いと小さく見ゆるは、いとをかし

日入りはてて、風の音、虫の音など

はた、言ふべきにあらず

冬はつとめて

雪の降りたるは、言ふべきにもあらず

霜のいと白きも、またさらでも

いと寒きに、火など急ぎおこして

炭持てわたるも、いとつきづきし

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば

火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし